

### 1 自己評価及び外部評価結果

#### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2192600225		
法人名	株式会社 You More Smile		
事業所名	グループホームひなたぼっこ		
所在地	岐阜県揖斐郡大野町稲富1108-3		
自己評価作成日	令和5年11月10日	評価結果市町村受理日	令和6年4月10日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/21/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=2192600225-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search">https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/21/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=2192600225-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search</a>
----------	---

#### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 中部評価センター		
所在地	岐阜県関市市平賀大知洞566-1		
訪問調査日	令和5年11月20日		

#### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

入居者おひとりおひとりの想いや、残っている力を大切に、その人らしい暮らしが続けられるように常に考えています。  
1ユニット9人のみの少数ホームであることを強みとして、入居者それぞれに寄り添う時間を多く設けることができます。  
食事3食ホームのスタッフが調理しており、入居者それぞれの嗜好や体調、栄養状態に合わせて、季節に合わせたメニューなど、臨機応変に提供しています。

#### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

新型コロナウイルス感染症が5類に変更されたが、ホームでは感染への警戒を緩めていない。終始一貫した感染防止の対策を講じたおかげで、利用者はこれまでに一人の感染者も出していない。防御用の資材が不足した際には、行政からの手袋(グローブ)の支給があった他に、地域の中学校からは善意のマスクの提供があった。  
コロナ禍によって外出支援は自粛しているが、ホーム内で利用者の意向に沿った支援を行っている。モップ掛けを自らの役割と考えている男性利用者は、他の利用者には役割を渡さない。洗濯物を干したり取り込むのも彼の役割となっている。新聞のスクラップを趣味とする利用者や、壁に作品を飾る利用者、ベッドの位置を変えて部屋の模様替えを楽しむ利用者もいる。

#### V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
43 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:15)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	50 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:8,9)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
44 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:14,27)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	51 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度ある 3. たまに 4. ほとんどない
45 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:27)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	52 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:3)	○ 1. 大いに増えている ○ 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
46 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:25,26)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	53 職員は、生き活きと働けている (参考項目:10,11)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
47 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:36)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	54 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
48 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:20)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	55 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどいない
49 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:18)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	住み慣れた地域で暮らし続けることの意義を職員間で理解し、実践につなげるようにしている	「家庭的な環境の中で、利用者の自立した生活を支える…」との理念を職員が共有し、日常生活の中で実践している。利用者は食事の盛付けをしたり、洗濯物を干したりすることを日常としている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	感染予防が続き、利用者自身が地域との交流をすることが困難になっていたが、運営推進会議の対面開催が可能となった事もあり、少しずつつながりが維持できるよう努めたい	散歩や職員との買い物外出等を除けば、利用者が地域に出ていくことは数少ないが、地域の認知症理解は進んでいる。常習的に無断離設を繰り返す利用者があるが、見つけた地域住民から連絡が入る。	
3	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	施設内実施の運営推進会議は書面開催としており実施できていなかったが、地域内の合同運営推進会議は4か月毎に参加しておりその場では各施設の取り組みや介護事例の発表などを行い情報交換をしている	過去1年間に、地域の他法人ホームとの合同開催の運営推進会議(対面)が4回開かれ、共通の課題についての話し合いが行われている。残る2回はホームの単独開催であるが、コロナ禍によって書面開催となっている。	
4	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	必要時は連絡をとり、協力関係を継続している。とりわけ感染症対策等の報告や相談の機会は頻繁に持っている	毎月、行政(町)主導で「地域ケア会議」が開催され、管理者が参加している。今年度から輪番制となり、年に1回の参加となった。会議には、町内で介護事業を営む他業種の事業所も多数参加している。	
5	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束は有益性はなく、ケアの中の選択肢にも含めないように常に意識し、スタッフミーティング内でも常に身体拘束に当たらないのかを考えるようにして実践している	ベッドから転落する危険のある利用者があり、ベッド柵を設けて対処している。規定通りに、家族の同意をとったり記録に残したりしているが、スタッフミーティングでは、常に身体拘束(ベッド柵)の是非について話し合っている。	
6	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることのないよう注意を払い、防止に努めている	日頃のケアの中で、スタッフが一生懸命になりすぎた結果、利用者の気持ちが落ち込むこともあり、行き過ぎるとそれは虐待になるということなど、学ぶ内容だけでなく些細なことまで留意してきたい	スタッフミーティングで、他事業所で起きた虐待事例(廊下でのおむつ交換等)を取り上げて話し合い、精神的虐待や経済的虐待についても意識を高めている。自宅でのネグレクト(介護放棄)があって、入居となったケースもある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	家族状況や生活環境の多様性を感じる機会も多くなり、入居者の権利擁護に係る制度も重要となってきている 本部と相談をしながら対応できるようにしていきたい		
8		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に利用者やご家族との信頼関係を築くことは大変に重要であると考え、入居時だけに限らず入居後や制度改定時においても説明対応させていただく旨を伝えている		
9	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	コロナ禍にて頻りに面会などは難しい状況ではあったが、現在は面会を可能にしており、面会時などにはお話をさせていただき希望などをお聞きするようにしている	これまでに、利用者には一人のコロナ感染者も出しておらず、コロナの5類移行後も、感染への警戒を緩めていない。特別な場合を除いて家族面会は事務所内で行い、共有空間への立ち入りを認めていない。	
10	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	スタッフミーティングやその他のタイミングでも施設へは顔を出し、その際には必ずスタッフと会話をするようにしている また、随時電話などでコミュニケーションを図っている	毎月のスタッフミーティングには、法人本部から2名の職員（管理層、介護支援専門員等）が出席している。職員全員の参加を原則としており、職員意見がホーム内だけでなく、法人にまで届く仕組みがある。	
11	(9)	○就業環境の整備 代表者は、管理者及び職員個々の努力や実績、勤務状況を把握するとともに、職員が向上心を持って働けるよう、ワーク・ライフ・バランスに配慮した職場環境や就業条件の整備に努めている	業務評価及び評価に応じた昇給なども実施し、現場からの必要に応じて環境の整備なども出来る限り対応している	年に2回、職員が自己査定を行い、管理者が上司考課を行う人事考課制度が導入されている。人事考課の結果を、職員の処遇（昇給、賞与等）に反映させている。娘の出産や孫の世話等、ワーク・ライフ・バランスに配慮した時短勤務を認めている。	
12	(10)	○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	スタッフミーティングの日程にあわせ研修の機会を設けるなどスタッフの知識などを増やす機会を設けている	運営母体の変更があり、法人主導の研修は行われていない。しかし、毎月のスタッフミーティングを利用し、勉強会を行うことがある。外部からリモート研修の案内が来るが、機器の操作に難点があり、研修に参加する環境にない。	介護施設を含む福祉事業全般に、ICT化(情報通信技術の活用)が進んできている。苦手意識を払拭し、業務の効率化を推進することが求められる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会づくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域内の合同運営推進会議への参加もしており、その中で様々な情報を共有することができている		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
14		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居されている方は決して何も出来ない方ではなく、今まで生きてこられた中での経験や知識もあるため、相談に乗っていただいたり、経験談をお聞かせいただいたりしている		
<b>III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
15	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	施設における集団生活という事もあり、ある一定の暮らしのリズムが形成されているが、少人数であることの強みとして個人の気持ちに沿えるように取り組んでいる	自らの思いや意向を口に出せる利用者もいるが、全く表出できない利用者もいる。家族からの特に強い意見や要望がなければ、職員が利用者の気持ちを推し量って支援している。	
16	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	関わる人からの情報提供などをいただき、スタッフでも何が今必要なケアなのかを考え反映している	利用者の状態が安定していることもあり、これまでの短期3ヶ月、長期6ヶ月の目標設定が、短期6ヶ月、長期1ヶ年に変更となった。介護計画作成にあたって、関係者への聞き取りが十分とは言い難い。	介護計画書第1表の「利用者、家族の意向」や「総合的な援助の方針」、第2表の介護計画の中身が、毎回同じ内容で繰り返されている。介護計画の策定方針を再考されたい。
17	(13)	○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録を書いてないのはケアをしていないのと同じという指導を定期的におこない、記録の大切さや情報共有の大切さを伝えている その中で、現状のケア内容などについても提案できる体制にしている	ホームの方針として、支援の記録を丁寧に残している。利用者個人に関わることは「介護記録」に、全体に関することは「業務日誌」に記録し、職員間で情報共有が必要なことは「申し送りノート」を活用している。	
18	(14)	○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われず、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	グループホームは他の介護保険サービスを利用できないため、施設が契約し、訪問看護による健康管理サービスと音楽療法士による音楽療法をすべての入居者に提供している	毎月2回、音楽療法の講師が訪れ、利用者の生活に潤いを持たせている。夏には鳴子を使った盆踊りを、クリスマスの時期にはハンドベルをと、折々の季節に気を配った小道具(楽器)が用意されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	本来であれば、地域資源との交流を促進していきたいが、コロナ渦により困難な状況であった。今後、交流を再開していきたい		
20	(15)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時に、それまでのかかりつけ医への診療を希望されている方は継続していただける旨をお伝えしている 訪問診療時には情報の提供などを行い、施設での様子なども伝えている。	利用者全員がホーム協力医をかかりつけ医とし、2週に1度の訪問診療を受けている。医療連携を組む訪問看護師が毎週訪れ、利用者の健康管理にあたっている。歯科衛生士による口腔ケアは、月に1度の実施である。	
21	(16)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院時はサマリーの提供をどちらも行き、入院退院においてスムーズに受け入れができるように努めている 退院時には医療から必要な情報提供をしていただいている	誤嚥性肺炎で入院した利用者が、入院中に胆嚢炎が見つかって2ヶ月間の入院となった事例がある。コロナ下、病状の報告や退院の打ち合わせはすべて電話で行われた。入院時はホームから、退院時は医療機関から、サマリーが提供されている。	
22	(17)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した際にはご家族との話し合いを行い、施設で出来る対応とご家族の望まれる事などの照らし合わせを行っている 入居時より重度化の指針に基づいた説明もおこなっている	過去にはホームでの看取りを経験しているが、重度化に伴って医療行為が発生し、医療機関に入院するケースが多い。退院後も医療行為が必要な場合は、他施設へ移ることとなるが、その際にも家族が納得する説明を行っている。	
23		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応はスタッフミーティング内などでも随時確認をおこなっている 連絡先などは電話機の側に連絡先一覧が確認できるように設置している		
24	(18)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回の避難訓練を実施している 昨今の異常気象や豪雨などに備え、災害時の避難確保計画に基づく災害避難等についても都度話し合っている	裏山が崩壊すると、ホームの一部(事務所)が土砂災害に巻き込まれる恐れがある。ハザードマップ上でも、土砂災害の警戒地域に指定されている。警報等が発令された場合、危険箇所(事務所)の反対側に逃げることにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
25	(19)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	誰もが老いたら優しく接してほしいという気持ちをもっていることを忘れずに、自分がされたら辛いような声掛けは行わないよう指導をしている	利用者一人ひとりを尊重し、「馴れ」から知らず知らずのうちに礼を欠くことが無いよう、スタッフミーティングでは常に注意喚起をしている。利用者の呼称は、苗字にさん付けが基本である。	
26		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者おひとりおひとりとの密な人間関係を築くことで表出していただいている 遠慮がちで感情や意思の表出が難しい方については表情などに配慮し、伺うようにしている		
27		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	施設の大まかな日課はあるものの、「1日のうちに終わらせるか、できなければ明日でもかまわない」という考え方であるため、都合を優先する必要ないことが大半である		
28	(20)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	毎食スタッフが献立を考え、調理し提供しているため、スタッフも利用者の嗜好を把握している。入所時や生活の中でも嗜好を確認し、楽しく食事がしていただけるようにしている	食事は利用者の楽しみの一つであり、3食手作りの食事をほとんどの利用者が完食している。職員は利用者の嗜好や適量、制限食、調理形態等を把握しており、ご飯に限っては計量して配膳している。	
29		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や水分量は記録により把握と調整を行っている 変化があった際は訪問看護師や医師に相談を行うなど健康維持ができるように配慮している		
30	(21)	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	歯科の往診が定期的であり、歯科衛生士からの指導を仰いだりしながら、適切な口腔ケアを行うようにしている	月に1回、歯科衛生士が訪問して利用者全員の口腔ケアや指導を行っている。義歯の作製や調整等、歯科医の治療が必要な場合には、歯科衛生士を經由して歯科医に情報が提供されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	それぞれの排泄記録を把握し、適切に声掛けや誘導を実施している 入院などで一時的に排泄の状態が落ちてしまっても、以前の状態に戻れるように考えて援助をおこなっている		
32		○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に応じた入浴の支援をしている	入浴は1人ずつゆっくりとおこない、利用者おひとりおひとりとの大切なコミュニケーションの時間となっている		
33		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	部屋は全室個室となっており、休みたいときに休んでいただけるようにしている。		
34	(22)	○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬の内容などを把握し、薬に関わることの責任についても理解するようにしている。特に副作用については服用時に変化があった時などには常に意識をするようにしている	直近に誤薬事故(他の利用者の薬を飲む)があり、薬局と連携して対処し、大事には至らなかった。以降、可能な利用者には、一人ひとりの手のひらに薬を載せ、確認した上で服薬してもらっている。	
35	(23)	○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日常の中でお手伝いを依頼させていただく場面などもあるが、個々の得意なことなどをお願いし出来ることの誇りなどを感じていただけるような声掛けを行うようにしている	モップ掛けを役割としている男性利用者があり、洗濯物を干したり取り込むのも役割となっている。新聞のスクラップを趣味とする利用者や、ベッドの位置を変えて部屋の模様替えを楽しむ利用者等、本人の意向を尊重して支援している。	
36	(24)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	感染予防が続いていたが、外出レクを再開したい。散歩程度の外出は既におこなっている。ご家族との外出については感染予防対策をお願いしてすすめている	今春、桜の花見は実現させたが、コロナ禍前のような自由な外出支援はできていない。現在は、ホーム周辺の散歩や職員の買い物に帯同する程度の支援に留まっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭の管理については責任が持てないためおこなっていないが、家族のご理解と責任において、多少はご自身で持つ方もおられる		
38		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話をかけたいという訴えにはご家族の協力、了承のもと援助をおこなっている。手紙などは出したいとの依頼があれば対応している		
39	(25)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用部において、一日の大半をここで過ごす方も多いため常にレイアウトなどに配慮し、生活がしやすいように考えている。	ホームの中央部分に広いリビング兼食堂を配し、その周りを台所や居室が取り囲んでいる。日中は、ほとんどの利用者が居室に戻ることなく、ここで過ごしている。壁には、民生委員の手による抽象画2点が飾られている。	
40		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用部でも、おのこの過ごし方は違うため、一人で過ごされる方の席や、誰かと過ごしたい方の席の配置などに常に配慮をしている		
41		○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は全室個室となっており、使い慣れた家具などをお持ちいただくよう案内しているさほど物はもってきては下さらないものの、利用者にとっては自分の空間となり落ち着けるようである		
42		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	文字が読めない方の場合にはご案内するが、理解が出来る方のためにわかりやすい文字表示などを活用し、自ら動いていただけるようにしている		